

解説：『モンゴル民族キリスト教史』とバイカルさんの翻訳について

芝山 豊
清泉女学院大学

ここに収めた桜美林大学バイカル准教授による翻訳は、中華人民共和国、中央民族大学のモンゴル人若手研究者、宝貴貞准教授、宋長宏准教授両氏による共著、『蒙古民族基督教宗教科史』の第1章部分である。原著は、2008年に同大学の「985 プロジェクト」『宗教と民族研究叢書』の一冊として、北京、宗教文化出版社から出版されている。

目次を見ると、序説に続き、第1章大モンゴル及び元朝期のネストリウス派キリスト教、第2章「大モンゴル及び元朝期のカトリック」、第3章「大モンゴル及び元朝期のキリスト教布教と宗教対立」、第4章「モンゴル及び元朝時代の宗教政策」、第5章「明清朝時代のキリスト教宣教の概観」、第6章「イエズス会期のモンゴルカトリック」、第7章「ラザリスト会期のモンゴルカトリック」、第8章「スクート会期のモンゴルカトリック」、第9章「モンゴルカトリックの三大教区」、第10章「清朝末期の宗教文書」、第11章「中華民国期の内モンゴルカトリック」、第12章「カトリックと現代モンゴル内モンゴル社会事業」、第13章「内モンゴルにおけるプロテスタント宣教」、第14章「中華人民共和国期のキリスト教の概観」、さらに巻末に

付録として「モンゴル民族キリスト教史関係文献目録」を付している。

まことに広範な内容である。これほど網羅的な記述は世界的にみても珍しく、特に中華人民共和国においては、モンゴルのキリスト教通史としては初めて出版された画期的な書物である。

残念ながら、この第1章について言えば、Devin DeWeese の著作や、C.D.Hunter の“The Conversion of the Kerait to Christianity in A.D.1007”等1990年代西洋語で発表された研究への言及がない等、参考資料こやや偏りがあり、2008年現在の最先端まで含む網羅的な研究とは言い難い。また、利用している資料間の内容の食い違いがそのままであったり、同じ内容が単純に繰り返されていたりという叙述の荒さも目立つ。しかし、そうした欠点はあっても、幾つかの面で高く評価し得る。

まず、これまで社会主義国の文献にありがちであった教条的な宗教観や中華思想的な視点をとらないこと。また、偏狭な民族主義的バイアスによって、モンゴルやアジアを本質化し、西洋世界とキリスト教を同一視して、他者化するという安易な姿勢をとっていないこと。この本の著者たちは、モンゴルの多様性を正し

くとらえ、その形成期に果たしたキリスト教の影響を積極的に評価しようとしており、なにより、現在のモンゴルのキリスト教を過去の歴史との連続性の中でとらえようとするバランス感覚のある研究姿勢をもっている。

書名が「モンゴル民族」となっていることに注目していただきたい。このモンゴル国ではあまり使用しない用語は、内モンゴルの立場を明確に示すものだが、キリスト教の世界が国家のレベルにとどまらない共同体であるという観点からも、この跨境的表現は示唆的である。モンゴル人による国家に暮らす研究者には持ち得ない視点は、キリスト教の本質である「もともと小さくされた人々」からの視点につながっている。

筆者は、訳者から翻訳の話を聞いた時、第5章以降の翻訳を勧めた。佐伯好郎や、江上波夫、あるいは佐口透といった碩学の著作、あるいは、最近ではR. C. フォルツの翻訳等を通じて、モンゴルのネストリスウス派については日本人にも比較的広く知られており、情報としての新鮮さはないからである。それにひきかえ、特に第8章以降の内容については、拙著『南北モンゴルカトリック教会の研究』等ごく少数の研究があるのみで情報として大きな価値がある。

しかし、バイカルさんは第1章からの翻訳にこだわった。彼は、原著者たちと同じく、現代のモンゴルのキリスト教は

モンゴルがハイブリッドな集団として出現した時代からの伝統としてとらえなければ理解できないという信念をもっている。その信念は、内モンゴル出身のモンゴル人として日本のキリスト教系大学に勤務する彼の一種の皮膚感覚を通じてのものようである。そして、さらに、彼に切迫した思いをつのらせている事情があるという。

最近、ウランホオワの遺跡が調査され、その結果が世界を驚かせた。内モンゴルや新疆での考古学的研究は新時代を迎えており、バイカルさん自身もネストリスウス派の遺跡におけるフィールド調査にも携わっている。その現場で、彼は無残に盗掘された墓所、散らばっているモンゴル人キリスト教徒たちの骨を目の当たりにしたのである。

盗掘は昔のことではない。今日、モンゴル高原とその周辺を覆う拝金主義の波の中で、埋蔵文化財を私的に掘り出し、金目のものを国内外の好事家や研究者に売り渡そうという輩が跋扈しているというのである。中国やモンゴルの人々に古人への敬意と歴史文化財への重要性を理解してもらうためにも、この事実を知らせ、日本の読者に関心を抱いてもらうことが有効だと、彼は考えたのである。ここに付された数集の写真は、訳者バイカルさん自身が現地で撮影したものである。

なお、原著の中国語文の各章内の節で

の重複した記述は、一般の読者が翻訳として読むには煩雑過ぎる。訳者はそれを考慮して、一部、内容の重複する節を省いている。

第1章で扱われている時代、モンゴル系、チュルク系の言語をペルシヤ系の言語に移し、それに漢字に当てたり、西洋語の音韻にあてはめたりということが行われていた。原著の記述が異なる時代や言語の文献から多くの引用を行いながら進められる以上、用語や人名、地名の標記やゆれが大きく、記述内容に形式的な矛盾が生じるのも無理からぬことである。この翻訳では、日本語で慣用的に熟していると思われる人名、地名は読者の知識と一致するようにつとめつつ、明らかな誤記や多言語重訳による混乱などは、適宜文脈をおえる程度に整理し、原著の雰囲気そのまま反映する訳になるような努力されているように思える。(モンゴル人の立場からは、歴史的考証とは別の意味から、チンギスはカンやハンではなく、ハーンと表記され、漢字音訳のみで伝わる『元朝秘史』は、モンゴル語、本来の書名、『モンゴルの秘史』と表記されている。)

誰が行うにしろ、翻訳に完全ということはないだろう。そして、読者からの叱声によって、よりよいものになってくることもまた間違いのないことだと思う。